

査読研究ノート

斎藤公子の「リズム遊び」における身体運動の意義に関する研究 — 幼児期の「多様な動きの経験」を視点として —

A Study on the Significance of Physical Exercise in Saito Kimiko's "Rhythm Play" : From the Viewpoint of "Various Movements Experience" in Early Childhood

入江 眞理*
IRIE Mari

要約

本研究によって、斎藤の「リズム遊び」では、幼児期において獲得しておきたい3つの基本的な動きが含まれ、「多様な動き」が経験されていることが明らかになった。運動による身体の発達の観点から、斎藤が目目のすべての子どもたちの発達を願い、具体化した「リズム遊び」は、現代社会においてもその意義が失われていないことが確かめられた。

キーワード：斎藤公子、「リズム遊び」、「多様な動き」、「幼児期運動指針」、ガラヒュー

- I. 研究の背景と目的
- II. 研究の方法
- III. 斎藤公子と「リズム遊び」
- IV. 観察の概要と分析の方法
- V. 結果と考察
- VI. まとめ

I. 研究の背景と目的

現代社会における社会環境・生活様式の変化は、子どもが体を動かして遊ぶ機会の減少を招いている。¹⁾ この問題は、体力・運動能力への影響だけでなく、「意欲や気力の減弱、対人関係などコミュニケーションをうまく構築できないなど、子どもの心の発達にも重大な影響を及ぼす²⁾」ことが指摘されている。このような現状に、文部科学省は2012年、

「主体的に体を動かす遊びを中心とした身体活動を幼児の生活全体の中に確保していく³⁾」ことを目指し、「幼児期運動指針」を策定し、翌年に『幼児期運動指針ガイドブック 毎日、楽しく体を動かすために』⁴⁾を発行した。拙稿（入江 2019）⁵⁾では、幼児期の教育として普及しているリトミックに着目し、運動による身体発達の視点から、リトミックが子どもの成長に資するものであることを明らかに

（2022年9月9日受領、10月5日最終版受領、10月5日受理）

* 静岡産業大学経営学部 准教授

1) 文部科学省『幼児期運動指針ガイドブック 毎日、楽しく体を動かすために』幼児期運動指針策定委員会、2013年、2ページ。

2) 『幼児期運動指針ガイドブック』2ページ。

3) 『幼児期運動指針ガイドブック』48ページ。

4) 文部科学省『幼児期運動指針ガイドブック』

5) 入江眞理『幼児期における身体運動』への実践に資するリトミックについての研究—運動による身体発達の視点から—『ダルクローズ音楽教育研究 第44号』、2019年、23～33ページ。

している。当研究において、リトミックの教育理念と方法を検討した結果、音楽的能力の涵養だけでなく、身体的能力の養成、さらに、それらを通して培われる人格形成の基礎という多面性をもつ教育であることが確かめられている。

そこで本研究では、リトミックを土台とし、運動による身体の発達を教育の中心におく斎藤公子(1920-2009)の「リズム遊び」⁶⁾を研究の対象として検討する。斎藤は、保育実践を重ねる過程で子どもたちの体力の低下に危機感を抱き、「脳の発達、知的発達のため⁷⁾」に身体をつくること、「...手や足などを動かす各運動神経を発達させる⁸⁾」ことを目的として「リズム遊び」を体系化していた。また、現在も斎藤の「リズム遊び」を保育で取り入れている保育所・幼稚園等は少なくない。

これまで斎藤の「リズム遊び」に焦点を当てた研究としては、今(2022)による幼稚園の実践事例を検討したもの⁹⁾、三村(2021)によるリズム研修会における「さくら・さくらんぼのリズム遊び」の特徴と成果、及び保育士の学びを明らかにしたもの¹⁰⁾、門脇・鷺見(2019)による斎藤のリズム運動¹¹⁾と幼児リトミックの比較によってそれぞれの特徴を明らかにした研究¹²⁾などがある。しかし、運動による身体の発達の観点から斎藤の「リズム遊び」の運動を分析した研究は管見の限り

見当たらない。そこで本研究では、「幼児期運動指針」における「多様な動きの経験」を視点として、斎藤の「リズム遊び」の身体運動を検討し、その意義を明らかにしたいと考えている。

Ⅱ. 研究の方法

「幼児期運動指針」において運動の意義は、体力・運動能力の育成、健康の維持にとどまらず、「何事にも積極的に取り組む意欲を育んだりするなど、豊かな人生を送るための基盤づくりとなる...¹³⁾」、と示されている。そして、幼児期は、「生涯にわたって必要多くの運動の基となる多様な動きを幅広く獲得する非常に大切な時期¹⁴⁾」であり、『動きの多様化』と『動きの洗練化』¹⁵⁾の2つの方向性があるとされている。そして、「動きの多様化」のために、「体のバランスをとる動き」、「体を移動する動き」、「用具などを操作する動き」の3つの基本的な動きを獲得しておく重要性が示されている。¹⁶⁾ そこで本研究では、「多様な動きを身に付けていくことができるように、様々な遊びが体験できるような手立て...¹⁷⁾」の一つを斎藤の「リズム遊び」に求め、その保育実践を分析する。¹⁸⁾ 「多様な動き」の分析にはガラヒュー(Gallahue, David L. 1943-) ¹⁹⁾の「運動発達の段階(The Phases of motor development)²⁰⁾」を用いる。身体・運

6) 斎藤の著作、及び斎藤に関する著作・研究論文においては、「リズム遊び」、「リズムあそび」それぞれの表記が用いられており、斎藤がその表記を区別して用いた経緯も確かめられなかった。そこで、本稿においては、斎藤自身の著作である『新版子育て・織りなした錦一乳幼児の発達の可能性は果てしない』(2013)における表記「リズム遊び」を用いることとした。

7) 斎藤公子記念館監修『DVDブック・映像で見る子どもたちは未来・乳幼児の可能性を開く第Ⅲ期：ブック斎藤公子のリズムと歌』かもがわ出版、2011年、20ページ。

8) 斎藤『斎藤公子のリズムと歌』20ページ。

9) 今由佳里「幼児期における身体の動きを伴った音楽活動に関する一考察：「さくら・さくらんぼのリズムあそび」の実践に着目して」鹿児島大学教育学部研究紀要 特別号(鹿児島大学) 2022年、17～23ページ。

10) 三村 真弓「よこはまりズム研修会の『さくら・

さくらんぼのリズムあそび』の特徴と成果：保育士の学びに着目して」『エリザベト音楽大学研究紀要第41巻』(エリザベト音楽大学) 2021年、41～52ページ。

11) その内容から本研究における「リズム遊び」と同義である。

12) 門脇 早穂子・鷺見 三千代「斎藤公子のリズム運動によるリズム教育：保育におけるリトミックとの比較調査から」『園田学園女子大学論文集』(園田学園女子大学) 2019年、83～101ページ。

13) 『幼児期運動指針ガイドブック』48ページ。

14) 『幼児期運動指針ガイドブック』49ページ。

15) 『幼児期運動指針ガイドブック』49ページ。

16) 『幼児期運動指針ガイドブック』49ページ。

17) 『幼児期運動指針ガイドブック』49ページ。

18) 調査に協力いただいた保育所では「リズム運動」の名称で行われていたが、担任保育士から本研究の「リズム遊び」と同じものであることを確認した。

動発達の側面だけでなく、認知的・情緒的発達などを含め、子どもを全体として統合された存在として見ることを重要視する立場である。²¹⁾「指針筆者註²²⁾のベースとなった調査研究結果²³⁾」である「体力向上の基礎を培うための幼児期における実践活動の在り方に関する調査研究報告書」(2011)²⁴⁾において、ガラヒューの著作²⁵⁾が参考文献として示されており、「幼児期運動指針」が取りまとめられた経緯に彼の研究の成果がうかがわれる。また、ガラヒューの基礎的な運動スキルである「姿勢制御運動」、「移動運動」、「操作運動」²⁶⁾は、表1に示すとおり、その内容からも、同指針における『体のバランスをとる動き』『体を

移動させる動き』『用具などを操作する動き』²⁷⁾の3つの基本的な動きとみなすことができる。加えて、幼児期運動指針における「心身の様々な側面の発達にとって必要な経験が相互に関連し合い積み重ねられていく²⁸⁾」という記述からは、子どもの発達を統合的に考えるガラヒューと同じ観点で幼児期の運動をとらえていることがわかる。

そこで本研究では、保育者による斎藤の「リズム遊び」の実践記録をガラヒューの基礎的な運動スキルである「姿勢制御運動」、「移動運動」、「操作運動」の3つに分類・検討し、「多様な動きが経験できるような様々な遊び」の一つであることを考察した。

表1 幼児期運動指針の基本的な動きとガラヒューの基礎的な運動スキル

幼児期運動指針における基本的な動きの例	ガラヒューの基礎的な運動スキルの種類
<p><体のバランスをとる動き></p> <p>立つ、座る、寝ころぶ、起きる、回る、転がる、渡る、ぶら下がる</p>	<p><姿勢制御運動></p> <p>曲げる、伸ばす、ひねる、回転、振る逆立ち、転がる、着地、止まる、身をかかわす、直立でのバランス</p>
<p><体を移動する動き></p> <p>歩く、走る、はねる、跳ぶ、登る、下りる、這う、よける</p>	<p><移動運動></p> <p>歩く、走る、跳ぶ、ホップする、スキップ、滑る、跳び越える、登る</p>
<p><用具などを操作する動き></p> <p>持つ、運ぶ、投げる、捕る、転がす、蹴る、積む、こぐ、掘る、押す、引く</p>	<p><操作運動></p> <p>投げる、捕る、蹴る、捕らえる、打つ、ボレー、はずませる、転がす、こぐ、たたく（*対象に力を加える／対象から力を受ける）</p>

David L. Gallahue, John C. Ozmun *Understanding motor development : infants, children, adolescents, adult* (1998)、ガラヒュー (著)、杉原 (訳)『幼少年期の体育 発達の視点からのアプローチ』(2009)、「幼児期運動指針」を基に入江が作成。

19) 「…全米スポーツ・体育連盟の会長や運動発達アカデミーの議長を務めたこともある世界的な運動発達研究の権威である。」(ガラヒュー著、杉原隆監訳『幼少年期の体育』大修館書店、2009年、201ページ。)

20) David L. Gallahue, John C. Ozmun *Understanding motor development : infants, children, adolescents, adults* 4th ed. Boston, McGraw-Hill, 1998, p.83

21) デビッド・L・ガラヒュー著、杉原隆監訳『幼少年期の体育』大修館書店、2009年、201ページ。

22) 「幼児期運動指針」を指す。

23) 『幼児期運動指針ガイドブック』60ページ。

24) 文部科学省 https://www.mext.go.jp/a_menu/sports/youjiki/index.htm (2022年9月30日閲覧)

25) Gallahue, Ozmun *Understanding motor development*.

26) Gallahue, Ozmun *Understanding motor development*, p.527 なお、用語の訳出には、ガラヒュー著、杉原隆監訳『幼少年期の体育』大修館書店、2009年を参考にした。

27) 『幼児期運動指針ガイドブック』50ページ。

28) 『幼児期運動指針ガイドブック』48ページ。

Ⅲ. 斎藤公子と「リズム遊び」

1. 略歴

宍戸 (2015)²⁹⁾による斎藤の略歴をまとめると次のようになる。斎藤は1920年に富山市で生まれた。東京女子高等師範学校保育実習科に入学し、倉橋惣三からペスタロッチ、フレーベルを、戸倉ハルにリズム遊戯を学んだ。1939年に卒業の際、倉橋から盛岡師範学校附属幼稚園主任としての就職を薦められるが断っている。1939年に結婚、二人の子どもを儲けたが、1946年には離婚した。1948年、台東区の社会福祉法人愛隣園³⁰⁾で働き始める。愛隣園は児童養護施設、診療所、相談室などをもつセツルメント³¹⁾であった。1949年、リトミックを小林宗作に、絵画を宮武辰夫に学ぶ。1954年に友人の紹介で深谷市の幼稚園に就職するが、2年後解雇される。同年、地域の母親らがつくったさくら幼児園に招かれる。その後、さくら幼児園は全焼するが、1962年には父母らが再建し、新しく社会福祉法人さくら保育園として認可されている。1971年、深谷市の農村地域にさくらんぼ保育園を開設した。1978年には第2さくら保育園を設立している。1985年に代表園長を引退し、さくら・さくらんぼ保育研究所所長に就任した。斎藤の著作は、1976年、写真集『あすを拓く子ら—さくら・さくらんぼ保育園の実践』³²⁾、1980年、『さくら・さくらんぼのリズムとうた』³³⁾、1982年、『さくら・さくらんぼの障害児保育』³⁴⁾、同年、『子育て—錦を織

るしごと』³⁵⁾などがあり、その後も著作を重ねた。また、映画「さくらんぼ坊や」や、その総集編である「アリス—ヒトから人間への記録」の制作にも協力している。2003年には、内藤寿七郎国際育児賞希望大賞・生命の尊厳賞を受賞、2009年88歳で没した。³⁶⁾

2. 保育思想

広木は、『新版』斎藤公子の保育論³⁷⁾の序文において、斎藤の保育思想と実践は次の3つで支えられていたと述べている。①ヒューマンイズムと美的追求、②科学の知見と文化への強い関心、③保育における実践の重視、である。①は、人間性の尊重のために自由・平等と一人ひとりの自立を追求するヒューマンイズムの精神に立って保育の実践を切り拓き、美を追求する生き方を尊重する価値観である。②は、斎藤がすべての子どもの発達保障に欠かせない科学の知見と文化への強い関心を持ち、最新の科学と文化を倉橋惣三 (1882-1955) から第一線の研究者・科学者から学んだ姿勢である。③は、保育を学ぶときには保育の理論と思想だけでなく、優れた保育実践から実践的に学ぶことの重要性、つまり実践の優位性である。³⁸⁾そして、斎藤の保育思想を次のようにまとめている。「ヒューマンイズムに立脚し、科学・文化を尊重して、そして実践に学び実践で検証するスタイルを貫きながら、自らの保育思想を形作ってきた³⁹⁾」。つまり、斎藤は自らの保育を、「...実践と

29) 宍戸健夫・秋葉英則・小泉英明・太田篤志・原陽一郎・石木和子『子育て—錦を紡いだ保育実践—ヒトの子を人間に育てる』エイデル研究所、2015年、16～18ページ。

30) 社会福祉法人愛隣園を指すと考えられる。斎藤が在職した当時は社会福祉法人の認可前であり、児童福祉法による財団法人の保育所としての認可であった。(社会福祉法人愛隣園略史 (<https://www.airindan.or.jp/history.pdf>) 2022年9月30日閲覧)

31) 宗教家や学生などが、都市の貧困地区に宿泊所・授産所・託児所その他の施設を設け、住民の生活向上のために助力をする社会事業。また、その施設。(広辞苑第六版)

32) 斎藤公子、川島浩 (写真)『あすを拓く子ら：さくら・さくらんぼ保育園の記録』あゆみ出版、1976年

33) 斎藤公子『改訂版さくら・さくらんぼのリズムとうた ヒトの子を人間に育てる保育の実践』群羊社、2010年

34) 斎藤公子 (編著)『さくら・さくらんぼの障害児保育』青木書店、1982年

35) 斎藤公子『子育て—錦を織るしごと』労働旬報社、1982年

36) 宍戸健夫・秋葉英則・小泉英明・太田篤志・原陽一郎・石木和子『子育て—錦を紡いだ保育実践—ヒトの子を人間に育てる』エイデル研究所、2015年、16～18ページ。

37) 斎藤公子+井尻正二『斎藤公子の保育論 [新版]』築地書館、2020年、2～12ページ。

38) 斎藤『斎藤公子の保育論』2～12ページ。

39) 斎藤『斎藤公子の保育論』10ページ。

運動を通じて、創造し、獲得...⁴⁰⁾」したのである。斎藤による「私の三十五年の保育所づくりは...自由を求めて生きるための長いたたかいであった...“生きたい”“創造したい”という内からの叫びの実現のためにほかならなかった⁴¹⁾」という記述からは、保育に向き合う並々な熱意と決意が伝わる。斎藤は、セツルメントにおける戦争孤児たちの預かりを保育の出発点とし、「母親たちに支えられ⁴²⁾」ながら、その熱意と決意をもって保育の場所を切り拓いた。そして、さまざまな分野の専門家らと交流をもちながら実践を重ね、斎藤が理想とする保育を実現し、その方法を検証し続けたといえる。

3. 「リズム遊び」

(1) 「リズム遊び」の3つの原型

斎藤は、「教育実践では、...戸倉ハル氏の自由表現・新遊戯、石原キク氏がアメリカから持ち帰った律動、そしてヨーロッパのダルクローズより直接学び日本で初めて教育に取り入れた小林宗作氏のリトミックなどが、私の栄養となり、土台となった。⁴³⁾」と述べ、「リズム遊び」には3つの原型があることを明らかにしている。3つの原型のうちの一つ、「律動」について、斎藤は次のように述べている。「...自然界の生きとし生けるものはすべてリズムをもっており、人間もその一員としてリズムをもっている。したがって、育ち盛りの幼い子どもの手、足、頭を、楽しい音楽に合わせてリズムカルに動かしてやれば、よりその発達を促すであろう...⁴⁴⁾」。そのため、動物や自然現象を体で表現することによって、骨

や筋肉、関節、神経系の発達を促すと同時に自然への認識が深まると考えたのである。⁴⁵⁾

2つ目の原型、「自由表現・新遊戯」については、次のように述べている。「東京女子高等師範学校保育実習科で学んだ、戸倉ハル先生の考案による“自由表現”と“集団あそび”である...倉橋惣三先生の“自由遊び”“自発性の尊重”の理論を具体化したリズム表現...⁴⁶⁾」である。斎藤は“自由表現”を求められた難しさを語りながらも、「...この人に教えられたことによって私は保育者として最も基本的なものが身についた...」と回顧し、戸倉による「五色の玉」を「リズム遊び」の一つとして用いている。

3つ目の原型、「リトミック」は小林宗作から学んでいる。斎藤は、リトミックについて次のように述べている。「...リズムにより精神と肉体の調和と発達をくだてた新教育法で心身のリズム運動により、神経作用を整調し、心身の調和と発達を助け、想像力と実現力を調和し、想像力を醒し、創造力を発達させる...⁴⁷⁾」。また、「リトミック体操」(ママ)によって、脱力をマスターし、疲れがとれる、とも記している。⁴⁸⁾さらに、斎藤は小林のリトミックによってピアノ演奏や聴音の能力にとどまらず、「物事を敏感に反応してとっさに判断し行動できる力が培われたのではないか⁴⁹⁾」と述べている。

また、3つの原型だけでなく、「祖先から伝わった子どもの遊び、民族舞踊などをリズム遊びに取り入れている⁵⁰⁾」ことを明らかにしている。ソビエト訪問時の経験をその理由に挙げ、民族舞踊の伝承を重視するとともに、

40) 斎藤公子ほか『斎藤公子保育実践全集；2子どもがみんな笑える日まで』創風社 1986年、167ページ。

41) 斎藤公子『子育て＝錦を織るしごと』労働旬報社、1982年、250ページ。

42) 斎藤公子『子育て・織りなした錦：乳幼児の発達の可能性は果てしない』かもがわ出版、2006年、21ページ。

43) 斎藤『斎藤公子のリズムと歌』20ページ

44) 斎藤『さくら・さくらんぼのリズムとうた』28ページ。

45) 斎藤『さくら・さくらんぼのリズムとうた』28ページ。

46) 斎藤『さくら・さくらんぼのリズムとうた』28ページ。

47) 斎藤『さくら・さくらんぼのリズムとうた』29ページ。

48) 斎藤『さくら・さくらんぼのリズムとうた』30ページ。

49) 斎藤『さくら・さくらんぼのリズムとうた』30ページ。

50) 斎藤『さくら・さくらんぼのリズムとうた』30ページ。

子どもの心身の発達に好ましく、かつ踊りとしての美しさのあるものとして「リズム遊び」に用いた。

斎藤の「リズム遊び」においては、「...子どもたちの観察によって、私は『金魚運動』『寝返り運動』『ハイハイ運動』...などを考え出した⁵¹⁾」、「...その原理を自分の中で消化して、子どもに合うように変化させ、そのままの形では実施しないように改めている⁵²⁾」と述べているとおり、「...時代とともに違ってきている子どもの身体の発達に応じて、必要な要素を取り入れながら進化発展させてきた⁵³⁾」ことを明らかにしている。つまり、斎藤は当時の指導者らから学び、身につけた教育の方法を実践の過程で創りなおし、自らの保育観に沿う要素を取り入れて「リズム遊び」を作りあげたのである。

(2) 「リズム遊び」の基本

斎藤は、「...協力者とともに30年間学び求めてきた、さくら・さくらんぼのリズムあそび・リズム運動⁵⁴⁾を抜きにして、この子どもたちの今日の発達は語れない...⁵⁵⁾」と述べているように、子どもの心身の発達を促すことを目的とし、「リズム遊び」を「子どもたちの幸せに必ずや強く結びつく⁵⁶⁾」ものと位置づけていた。また、「子ども主体のリズムあそび⁵⁷⁾」であることを重要視し、「リズム遊び」に関して次のような見解を述べている。①ピアノは大勢の子どもたちを動かすときの便宜的な器具であり、主役は保育者自身であるべきこと、②少人数の場合はピアノを用いず、歌いながら行くとよいこと、③リズム遊びは主たる保育者(担任)が子どもに必要な曲を選択し、長さや順序を決めるなど、責任を負って行うべきこと、④目の前にいる子どもにどのよう

に曲を与えるかを考え、伴奏を工夫して演奏することである。⁵⁸⁾

(3) 「リズム遊び」の指導法

「リズム遊び」の指導法としては、斎藤公子記念館監修の『斎藤公子のリズムと歌』の中で、次の9点が示されている。①季節を問わず全員裸足で行う。足の親指の蹴りを重視することから、床に直接足指を触れさせる必要がある。②模倣期を利用して自発的に行わせる。乳幼児は瞬間的に、自発的に模倣する力が強いことから、異年齢の集団で、年齢の高い子どもから低い年齢の子どもへと順に行う。③ピアノ曲に合わせてリズムカルに行う。④音楽を耳で聞き、そのリズムに合わせて体を動かす”というリトミックの理を応用するためである。リズム運動の音楽にはレコードは一切用いない。子どもが自分の耳で聞き、自分の頭で判断するのではなく、記憶によってただ機械的に無自覚に動き、リズム遊びの効果を半減させないようにするためである。リズム遊びの時に限らず、保育室や子どもたちの周りにはいつも澄んだ優しい歌声が響いているようにする。④運動は単純なものから複雑なものへと進める。「個体発生は系統発生をくりかえす」という生物の進化の原則に拠るものである。⑤正座を習慣づける。体育座りでは肩の骨が内側に入り、脳の活性化に必要な酸素が吸えないからである。⑥走る曲は年齢に合わせたスピードで行う。子どもが走る速さを観察してそのスピードに合わせる。また、動と静を組み合わせるなど変化をもたせる。⑦指示・号令・命令をしない。子どもの自発性、やる気によって運動する。保育者も子どもと一緒に全力投球して行う。⑧子どもが自分で判断して身体を動かす。自分

51) 斎藤公子『新版子育て 織りなした錦 乳幼児の発達の可能性は果てしない』かもがわ出版、2013年、119ページ。

52) 斎藤『さくら・さくらんぼのリズムとうた』、30ページ。

53) 斎藤『さくら・さくらんぼのリズムとうた』、20ページ。

54) 表記の区別に明確な説明はないが、斎藤の著作における記述から、「リズム遊び」における身体運動

を「リズム運動」としていることがうかがわれる。

55) 斎藤『さくら・さくらんぼのリズムとうた』9～10ページ。

56) 斎藤『さくら・さくらんぼのリズムとうた』10ページ。

57) 斎藤『さくら・さくらんぼのリズムとうた』11ページ。

58) 斎藤『さくら・さくらんぼのリズムとうた』11～12ページ。

で気づき、考える力を身に付けるためである。
⑨半袖・半ズボンで行う。腕、脚の屈伸を妨げないよう、ゆったりとした伸縮性のあるもの、丈夫で吸湿性のある素材がよい。プリントはインク面と床の間に摩擦が生じるため好ましくない。⁵⁹⁾

Ⅳ. 観察の概要と分析の方法

1. 観察の概要

観察対象者：I保育所の4歳児クラス（在籍：24名）。指導する保育者1名、補助の保育者1名。

観察期間：2020年11月13日、2021年2月24日、3月19日の計3回。いずれも活動の時間は10：00～10：30の30分間。

観察場所：遊戯室（約120㎡）

観察における参与の程度：受動的参与（観察時間中は、子どもの活動の妨げにならない遊戯室の隅から筆者が手持ちのビデオ機器で撮影した）。

倫理上の配慮：観察対象者である園、及び園児の保護者から調査協力に関する同意を得た後、静岡産業大学経営学部研究倫理審査の承認を経て実施した。

2. 分析の方法

保育者による「リズム遊び」の動画記録を映像と音声の分析ソフト、「EUDICO Linguistic annotater」（通称ELAN）⁶⁰⁾を用いてテキスト化した。注釈層として「子どもの動き」、「ピアノ曲」、「保育者の言葉がけ等」、「テンポ」を設けた。本研究の調査対象は子どもの身体運動であるが、「保育者の言葉がけ」、「テンポ」が子どもの行為に影響を及ぼす可能性を考え、検討の対象として加えた。注釈層のテキストに基づいて、「リズム遊び」をガラヒューの基礎的な運動スキル、「姿勢制御運動」、「移動運動」、「操作運動」の3つに分類した。ELANを用いた動画分析の一場面を下に示す（図1）。



図1 ELANを用いた動画分析

59) 斎藤『斎藤公子のリズムと歌』21～22ページ

60) マックスプランク心理言語学研究所開発。

表2 リズム遊びの種目と実施日

	種目 (曲名)	第1回 (2022/11/19)	第2回 (2022/2/24)	第3回 (2022/3/19)
1	うさぎ (うさぎ)	○	○	○
2	はしる (ちょうちょう)	○	○	○
3	あひる (あひる)	○	○	○
4	とんぼ (とんぼのめがね)	○	○	○
5	かめ (うさぎとかめ)	○	○	○
6	ブリッジ (ロンドン橋)	○	○	○
7	自転車こぎ (不明)	○	○	
8	金魚 (金魚のひるね)	○	○	○
9	きしゃ (きしゃ)	○	○	○
10	ボートレース (お舟)	○	○	○
11	うま (うま)	○	○	○
12	なべなべ (なべなべ)	○	○	○
13	スキップ (ホップステップジャンプ君)	○	○	○
14	かえる (かえる)		○	○
15	ギャロップ (ギャロップ)	○	○	○
16	スキップ (スキップキップ)		○	○

※『斎藤公子のリズムと歌』、『リズム表現曲集Ⅰ』を基に種目と曲名を特定した。

V. 結果と考察

1. 「リズム遊び」の実践種目

はじめに、動画記録の「ピアノ曲」と「子どもの動き」から「リズム遊び」の種目を確認した。全3回の内容は表2のとおりである。

上記のとおり、全3回の「リズム遊び」の実践は16種類であった。第1回(11月19日)に実施されたのは14種類、第2回(2月24日)が16種類、第3回(3月19日)は15種類であった。同じ種目の実践内容は3回ともほぼ同じであった。

2. 「リズム遊び」の実践内容

動画記録をテキスト化したところ、各種目の実践内容は次のとおりであった。①「うさぎ」では、両足を揃えてその場でジャンプしていた。曲のビートとジャンプのタイミングは合わせていなかった。②「はしる」

は、全速力で走る運動であった。待っているグループの子どもからは多くの声援があがった。保育者から手を自然に振るよう言葉がけがあった。③「あひる」は、上体を起こし、しゃがんで歩く運動であった。両手は伸ばして横に広げていた。④「とんぼ」では、前奏のときにはその場で両手を広げて水平に回し、歌が始まると手を広げたまま走り出した。曲の最後、だんだんゆっくりになるメロディに合わせて歩いていた。曲の終わりに合わせて静止し、片足を伸ばして後ろに上げ、両手は横に伸ばしてポーズを維持していた。静止のときには、保育者から膝の伸びやぐらぐらしないようにすることなどについての声かけがあった。⑤「かめ」では、腹ばいになり、両手で足首を掴んで上体を反らせていた。顔は天井を見るようにしっかりと上を向いていた。ピアノ演奏のテンポは、♩=180

くらいであった。⑥「ブリッジ」では、仰向けになり、頭を床につけた5点支持でブリッジをしていた。上体をしっかりと反らせ、かかとを上げて足指で支えていた。力を抜いて楽な姿勢で休憩する時間をはさみ、数回繰り返した。⑦「自転車こぎ」は、仰向けに寝て腰を両手で支え、足を高く上げて自転車こぎの動きをしていた。保育者から、足をしっかりと持ち上げること、「がんばって」などの声かけがあった。⑧「金魚」では、両足を伸ばして揃え、仰向けに寝る。両手は頭上で合わせ、背中をくねらせていた。ピアノの音域が1オクターブ上がるとうつ伏せになり、足を伸ばして揃える。かかとを上げて足指で床を捉え、両手は頭上に伸ばし、お腹をくねらせていた。保育者からは手を頭の上に置くように、といった言葉かけがあった。ピアノ演奏のテンポは♩=80くらいであった。⑨「きしゃ」では、手を汽車の車輪のように回しながら全速力で走っていた。ピアノで「汽笛」の音がしたらすぐにうつ伏せで寝る。この2つの動きを繰り返していた。かかとを揃えて上げること、手の指は広げる（パーにする）こと、ピアノを聞いてから動くことについて保育者の声かけがあった。テンポは前奏でだんだん速くなり、走っているときには♩=185くらいであった。⑩「ボートレース」では、膝を立てて座り（体育座り）、両手は体の横で床に置く。そのまま手と足の力で前に進む運動であった。部屋を縦に使い、向かい側の壁に着いたら折り返して戻ってきた。一往復したら、2人組になり両手をつなぐ。一人が後ろ向きで同様に進み、一往復した。第2回と第3回では2人組の後、さらに4人組で行った。一人が後ろ向きになり、残りの3人が縦に並んで同様に進み、戻ってくる運動であった。ピアノ演奏のテンポは♩=185くらいであった。⑪「うま」では、手は手綱をたぐるように回しながらギャロップしていた。メロディが変わると手綱を引き締めるような動きに変え、一歩ずつピアノのメロディに合わせて歩いていた。ピアノ演奏のテンポは、ギャロップのときには♩=185くらい、歩くときには♩=90くらいで緩急のメリハリをつけていた。ギャ

ロップのときには、メロディ、あるいはビートと動きは同期させていなかった。保育者は「下から」と手の動かし方についての声かけをしていた。⑫「なべなべ」は、わらべうた遊びであった。歌いながら2人組（第2回、第3回では3人組まで）で楽しんでいた。うまくいかないグループには保育者が手を取ってくぐり方の援助をしていた。⑬「スキップ」では、ピアノの弾むリズムに合わせてスキップをしていた。⑭「かえる」では、足を開いてしゃがみ、両手を足の間の床に置く姿勢から、高くジャンプしていた。曲のビートとは合わせていなかった。テンポは♩=100くらいであった。⑮「ギャロップ」は、手のひらを上に向けて広げながら横のギャロップをしていた。曲の4小節ごとに一人ずつスタートしていた。待っている間、曲のビートに合わせてクラブしている子どもも多く、動いているときもビートと動きを合わせようとしていた。保育者は手を横に広げることを実際にやってみせていた。ピアノ演奏のテンポは♩=105くらいであった。⑯「スキップキップ」では、スキップをしながら、曲のフレーズごとの休符でひざを抱えてしゃがんで止まっていた。保育者は静止について「ふわっと」や、静止のときに「かかとは上げて」、「つま先を使ってごらん」といった声かけをしていた。

全体を通して、保育者の言葉による指示は限られており、必要なことのみ短く伝える姿勢があった。活動の切り替えにはピアノによる音の合図が用いられていた。また、楽曲の一部をピアノで演奏することによって、次の活動の提示とそのための準備を促していた。子どもたちは、楽曲の情報、たとえば、曲想、テンポ、音の高低、フレーズなどを聞き分け、何をすべきかを判断し動きを変えていた。

3. ガラヒューの基礎的運動スキルによる分類

前項でテキスト化した「子どもの動き」をガラヒューの基礎的な運動スキルである「姿勢制御運動」、「移動運動」、「操作運動」の3つに分類した（表3）。

表3 「リズム遊び」における子どもの動きと基礎的な運動スキル

	種目	子どもの動き	基礎的な運動スキル		
			姿勢制御運動	移動運動	操作運動
1	うさぎ	両足を揃えてその場でジャンプする。手は下げている。		○	
2	はしる	思い切り走る。両手は斜め後ろに伸ばしている子や走る動作に合わせて振っている子がいる。		○	
3	あひる	しゃがんで歩く。上体は起こし、両手は伸ばして横に広げる。	○	○	
4	とんぼ	前奏で両手を横に伸ばして広げ、水平に回す。歌が始まると手は広げたまま走り出す。曲の最後でだんだんゆっくりになるピアノに合わせて一歩ずつ歩く。曲の終わりと同時に静止してポーズをする。片足は伸ばして後ろに上げ、両手は横に伸ばしてキープする。	○	○	
5	かめ	腹ばいになり、両手で足首を掴む。上体は反らせる。顔は天井を見るように上を向く。	○		
6	ブリッジ	仰向けになり、頭を床につけたブリッジで上体をそらせる。足指で支える。力を抜き、休憩する。	○		
7	自転車こぎ	仰向けに寝て腰を両手で支え、足を高く上げて自転車こぎをする。	○		
8	金魚	仰向けで寝る。両足は伸ばして揃える。両手は頭上で合わせる。背中をくねらせる。 打つぶせになる。足は伸ばして揃え、かかとを挙げて足指で床をとらえる。両手は伸ばして頭の上で床をとらえる。背中をくねらせる。	○		
9	きしゃ	手を汽車の車輪のように動かしながら全速力で走る。「汽笛」のピアノの音がしたらすぐにうつぶせで床に寝る。ピアノを聞き分けて2つの動きをくり返す。	○	○	
10	ボートレース	膝を立てて座り（体育座り）両手は体の横で床に置く。そのまま手と足の力で前に進む。部屋の向こう側に着いたら折り返す。戻ったら両手をつないで二人組で同様に行う。（2回目、3回目では4人組まで）		○	○
11	うま	ギャロップする。手は手綱をたぐるように回す。B部では手綱を引き締めるように手を回しながら、一歩ずつピアノのメロディに合わせて歩く。		○	
12	なべなべ	歌いながら二人組でなべなべのわらべうた遊びをする。			○
13	スキップ	スキップをする。		○	
14	かえる	しゃがんで足を開き両手をその間について高くジャンプする。	○	○	
15	ギャロップ	一人ずつ横にギャロップする。手のひらは上向きで真横に伸ばす。4小節ごとに次の子どもがスタートする。		○	
16	スキップキップ	スキップをし、フレーズごとにある休符で両足でひざをかかえてしゃがむ。	○	○	

上記のとおり、姿勢制御運動に該当する動きは「あひる」、「とんぼ」、「かめ」、「ブリッジ」、「自転車こぎ」、「金魚」、「きしゃ」、「かえる」、「スキップキップ」の9種目、移動運動に該当する動きは、「うさぎ」、「はしる」、「あひる」、

「とんぼ」、「きしゃ」、「ボートレース」「うま」、「スキップ」、「かえる」、「ギャロップ」「スキップキップ」の11種目、操作運動スキルに該当する動きは、「ボートレース」と「なべなべ」の2種目であった。

姿勢制御運動は、身体は一定の場所にとどまり、その水平軸、あるいは垂直軸を中心とする運動であり、平衡を保つことを重視する動的バランスの課題でもある。⁶¹⁾ 本調査の「リズム遊び」においては、「とんぼ」、「かめ」、「スキップキップ」など、静止している状態で様々なポーズで平衡を保つ場面が多く見られた。一定の場所にとどまる運動では、移動によるダイナミクスは生じないものの、手や足の指といった細部に留意しながら、平衡を維持する運動ができる。また、1つの種目、1つの曲の中でも動くことだけでなく、静止して足やかかとを上げるなどポーズを求める「とんぼ」、「スキップキップ」などがあった。このような斎藤の「動と静を交互に組み合わせる」⁶²⁾ 方法には、音楽のテンポを変えることによるもの、音楽の途中に合図となる音を挿入し動きを止めるもの、音楽のフレーズと休符を利用するものがあった。

移動運動は、身体がある位置から他の位置に水平に、あるいは垂直に移動する運動である。⁶³⁾ 「うさぎ」は垂直方向への移動運動である。水平方向への移動運動には、「はしる」、「スキップ」、「ギャロップ」など立った状態で移動するもの、「あひる」、「ボートレース」などしゃがむ、あるいは座った状態で移動するものがあった。運動のスピードでは、全速力で走ることを重視する運動、音楽に合わせることによる動きのコントロールを重視する運動があった。

操作運動には、粗大運動と微細運動がある。粗大運動とは、対象に力を加える、あるいは対象から力を受けることに関係する運動である。微細運動とは、対象を手で操作する際のコントロールや精緻さ、正確さを必要とする運動である。⁶⁴⁾ 「ボートレース」、「なべなべ」は粗大運動であり、どちらも複数で行うため、

互いに力を受け合う運動であった。相手の運動の力をうまく受け止め、それらの力を動きに活かすことが必要であった。

以上のように、今回の「リズム遊び」の保育実践においては、「姿勢制御運動」（「バランスをとる動き」）、「移動運動」（「体を移動させる動き」）、「操作運動」（「用具を操作する動き」）のそれぞれに該当する運動が行われていたことがわかった。

また、ピアノによる音や音楽は、次のような役割を果たしていた。①言葉に頼らない意思伝達の手段、あるいは指示、②音楽的な情報、たとえば曲想、テンポなどを変えることによる動きの調整、③歌をうたうことによる一体感の形成、であった。

Ⅶ. まとめ

前述のとおり、今回調査の対象とした「リズム遊び」をELANを用いて分析したところ、ガラヒューの基礎的な3つの運動スキルである姿勢制御運動が9種目、移動運動が11種目、操作運動が2種目含まれ、「多様な動きの経験」となることが確かめられた。この結果から、斎藤の「リズム遊び」は、「多様な動きを身に付けていくことができるように、様々な遊びが体験できるような手立て...⁶⁵⁾」の一つであり、「幼児期運動指針」の「生涯にわたって健康を維持したり、何事にも積極的に取り組む意欲を育んだりするなど、豊かな人生を送るための基盤づくり...⁶⁶⁾」に資するものであることが明らかになった。調査対象の保育実践は、斎藤の著作⁶⁷⁾に示されている指導方法を踏襲しており、斎藤の「リズム遊び」と考えてよいであろう。本研究によって、斎藤の「リズム遊び」における身体運動は、その方法と理念に体育の発達の視点から改めて根拠が与えられたといえる。斎藤が目目のす

61) Gallahue, *Developmental physical education for all children*, p.53

62) 斎藤『斎藤公子のリズムと歌』21～22ページ。

63) Gallahue, *Developmental physical education for all children*, p.56

64) Gallahue, *Developmental physical education for all children*, p.57

65) 『幼児期運動指針ガイドブック』49ページ。

66) 『幼児期運動指針ガイドブック』48ページ。

67) 斎藤『斎藤公子のリズムと歌』23ページ。斎藤『新版子育て 織りなした錦乳幼児の発達の可能性は果てしない』118～125ページ。

べての子どもたちの発達を願い、「実践に学び
実践で検証」し、「科学の知見と文化への強い
関心」をもって具体化した「リズム遊び」は、
現代社会においてもその意義は失われていな
い。

一方で、「リズム遊び」における音楽の役割
については、音楽による一体感の形成や運動
の喚起⁶⁸⁾という点ではリトミックと共通する
部分がうかがわれるが、音・音楽と動きの関
係性を検討するまでには至らなかった。今後
はELANの音声波形等を含めて分析・検討し、
さらに研究を深めたいと考えている。

謝辞

本研究にご協力いただいたI保育所の先生
方、及び園児と保護者の皆様に心より感謝申
し上げます。また、本研究は2020年度特別研
究支援経費による支援をいただきました。感
謝申し上げます。

⁶⁸⁾ 入江 『『幼児期における身体運動』への実践に資
するリトミックについての研究』31ページ。